

青年期後期における仲間集団経験発達による 攻撃性の質的検討

高田 毅

健康科学大学 健康科学部 福祉心理学科

Qualitative analysis of peer group formation as a determinant of
aggression neutralization in late adolescence

TAKADA Tsuyoshi

要 旨

本研究では、青年期後期における攻撃性と仲間集団経験発達の間を、自由記述の質的分析から検討した(N=139)。その結果、ピア優位群では攻撃性を中和化して用いることができ、チャム優位群では攻撃性が非中和の者が多く、未熟群では攻撃性を否認する者が多かった。さらに、ピア優位群において、内集団と外集団の両方に攻撃性が中和化される群と、内集団にのみ攻撃性が中和化される群の2種に分けられることが明らかになった。内集団における攻撃性の中和化機能が外集団にも般化されるという発達プロセスがあることが示唆された。

キーワード：攻撃性，仲間集団発達，青年期後期

I. はじめに

攻撃性と性衝動という2つの衝動を自我の支配下に置けるようになり、表現を磨くことは青年期の重要な課題である。しかし、近年目立つのは自己破壊的行動や攻撃性の暴発の問題である。攻撃性を押さえ込んでしまう抑圧や抑制の問題もよく見られる。これらは攻撃性をうまく取り扱えないという意味で共通点がある。Freud¹⁾がリビドーと攻撃性という欲動の二元論を提唱し、Hartmann²⁾が攻撃性の中和化の概念を提唱した。攻撃性が中和化されることによって、脱本能化したときに攻撃性は主張性や能動性、野心と言った形で³⁾成長促進的なエネルギーとして用いることができる。

小谷他⁴⁾は健常青年を対象とした「アイデンティティグループ」という集団精神療法を応用し

た実験装置の中での知見から健常群の攻撃性の取り扱いを考察している。攻撃性の問題は臨床群に留まらず健常群でもよく見られる。

前回の研究⁵⁾では、健常群を対象とした仲間集団と攻撃性の関連についての量的研究を行った。前回の研究で示した理論仮説は以下の通りであった。ピアシップを発揮することができない群では内集団での同質性が強いのが特徴であり、社会的比較に頼るので、外集団には直接攻撃性が向かう。一方、内集団では同調がメインとなり攻撃性は行動としては抑制されるが、潜在的にはそのまま残っているので攻撃性は高く中和化されない。同質性が強い集団では攻撃性の表現は抑制・抑圧がかかり磨かれにくく、社会的比較による中和化されない攻撃性に頼っているので、ピアシップを発揮することができない群には攻撃性を中和化する

のは難しいだろう。一方、ピアシップを発揮できる群では、社会的比較のために攻撃性を用いる必要もなく、攻撃性の取り扱い能力が内集団で磨かれているので攻撃性を内集団・外集団関係なく、攻撃性は中和化し、能動性や主張性といったより適切な形で表現できるであろう。よって、攻撃性は抑制・抑圧されず、主張性のような形で表現される。

結果は以下の通りであった。①ピア優位群、チャム優位群、未熟群の3つの類型が抽出された。②相互理解活動得点の高さが攻撃性の中和化を予測した。③内集団と外集団を区別して測定をしたにもかかわらず、理論仮説で想定した差異は見出せなかった。

③に関して、方法論の問題を考える必要がある。つまり、質問紙法の量的なアプローチでは攻撃性を取り扱う自我のメカニズムまで測定できず、結果として内集団と外集団の差異が現れなかった可能性がある。本研究の目的は、質問紙法における自由記述の質的分析によって、内集団と外集団を

区別することの意味を検討することとした。

II. 方法

攻撃性が中和化されて成長促進的なエネルギーとして使えているかどうかを質的に測定するために、橋本他⁶⁾の半構造化面接AIFAの攻撃性の質問を自由記述に適するように修正して用いた。また、対象が想定されている部分は「親しい友人」、「親しい友人以外」に分けて一部表現を修正して用いた。ここで「親しい友人」は内集団、「親しい友人以外」は外集団を想定している。このAIFAの項目は、Kernberg⁷⁾の正常な人格構造Normal Personalityに関する理論を基本にしている。集団同一性やエディプスコンプレックスに関する項目を加えて、より多角的に立体的に、青年期発達特有の健康な人格構造を描き出せるように作られている。この中から攻撃性の体験・認識能力、攻撃性の表現能力、攻撃性に対する自我機能の項目を参考にした。全部で9項目からなる。「日常生活で怒りや攻撃衝動を感じることもあるか、

表1 本研究で用いた自由記述の質問（橋本他⁶⁾を元に作成）

1	怒りや攻撃心、敵意という、何を思いますか？ 連想、イメージ、思い出す人など、どのようなことでも思い浮かぶことをお書きください。
2	日常生活で怒りや攻撃衝動を感じることはありますか？ 感じるとしたらそれはどんな時、どんな場面ですか？
3	親しい友人を想定してお答えください。日常生活でその人に怒りや攻撃衝動を感じることはありますか？ 感じるとしたらそれはどんな時、どんな場面ですか？
4	怒りや攻撃衝動をどのように親しい友人に伝えますか？ 具体的にお答えください。
5	親しい友人以外を想定してお答えください。日常生活でその人に怒りや攻撃衝動を感じることはありますか？ 感じるとしたらそれはどんな時、どんな場面ですか？
6	怒りや攻撃衝動をどのように親しい友人以外の人に伝えますか？ 具体的にお答えください。
7	日常生活で怒りや、攻撃衝動を感じる人として思い浮かぶ人は誰ですか？ 感じるとしたらそれはどんな時、どんな場面ですか？
8	質問7の感じに言葉を当ててみてください。どのような言葉がぴったりきますか？
9	質問7の怒りや攻撃衝動をどの程度感じましたか？
10	「誰かに当たる」「ずっと怒りが収まらない」など、怒りや攻撃衝動を感じたときの自分の特徴で思いつくことはありますか？
11	怒りや攻撃衝動はどうやって収めますか？

表2 カテゴリー分類図

攻撃性が中和される		① その対象に対して言葉で表現されていて、攻撃欲動が脱本能化され、攻撃的要素が見られなく、主張性・積極性・能動性が見られる。
攻撃性が中和化されない(非中和)	攻撃表現	② その対象に対して言葉や行動で表現され、表出は見られないが、表現の中に攻撃的要素が見られる。
	表出が混じる表現	③ その対象に対して言葉による表現だが、攻撃性の表出もあり、中和化されない攻撃的要素が見られる。あるいは積極性・能動性が弱く攻撃性が中和化されたとは見なせないもの。
	表出のみ	④ その対象に対して表現されないが、攻撃的要素がみられる表出。
	表出・表現なし	⑤ その対象に対して表現も表出もないもの。
	その他	⑥ 中和化されていないことは判断できるが、②から⑤にあてはまらないもの、情報量が少なく判断できないもの。
否認		⑦ 質問③(質問⑤)に対して、怒りや攻撃衝動は全く感じないと答えるもの。
分類不能		⑧ 記入がないものが質問③、④(質問⑤、⑥)に一つ以上ある。

あるとしたらそれはどんな時,どんな場面か」,「怒りや攻撃衝動をどのように伝えるか」の2つの質問は、親しい友人の場合と親しい友人以外の場合で分けて質問し、合計11項目の自由記述として用いた(表1)。その中で本研究では質問③、④を内集団、質問⑤、⑥を外集団に対する攻撃性の中和化を評定する項目として用いた。

これら質問を評定する際の、評定カテゴリーは次のように定めた(表2)。

なお、ここでは表出は何らかの内的過程と対応する無意識的身体的変化・活動とし、表現は意識的な表現あるいは行動として攻撃性を表すものとした。

評定手順は次の通りとした。

1. 質問③(質問⑤)をチェックして、否認かどうかをチェックする。否認ならば、⑦否認と評定した。
2. 記述の中に無記入があれば、⑧評定不能と評定した。
3. 否認でも評定不能でもなければ、中和化されているかどうかをチェックした。中和化していれば①中和化と評定した。
4. 中和化されていなければ、残りの②から⑥のどのカテゴリーにあてはまるかを評定した。

②から⑤のどれかに判定する際に情報不足な場合は⑥その他にした。

複数の要素が含まれる回答に関して、どれがメインであるかが判断できる場合は、メインの回答に対して評定した。

並列的に複数の回答が書いてあると判断される場合は、①から⑥の中で数字の小さいものを評定とした。つまり、中和が認められればそれを優先することにした。

作業仮説は以下の通りである。仮説1は、自由記述における攻撃性が中和化されるかどうかの評定の比率の違いをピア優位群、未熟群、チャム優位群ごとに比較したとき、 χ^2 検定が有意となるだろう。仮説2は、その残差分析において、ピア優位群は他の群と比較して攻撃性が中和化された者が多く見られるであろう。仮説3は、チャム優位群は他の群と比較して攻撃性が中和化されていない者が多く見られるであろう、と設定した。

Ⅲ. 結果

調査時期と配布方法

2006年12月に、A私立大学において、手渡しによる配布と授業の時間を利用した一斉配布を行った。学部生・大学院生で30歳までの未婚の

表3 性別・クラスターごとの自由記述の評定結果

内集団		中和化	攻撃表現	表出が混ざる表現	表出のみ	表出・表現なし	非中和その他	否認	評定不能	合計
ピア優位群	男性	11	0	0	0	1	0	4	0	16
	女性	11	1	1	0	2	0	4	0	19
	合計	11	1	1	0	3	0	8	0	35
未熟群	男性	6	0	1	0	1	0	7	0	15
	女性	6	0	3	1	7	1	7	0	25
	合計	12	0	4	1	8	1	14	0	40
チャム優位群	男性	4	0	1	3	0	0	8	3	19
	女性	12	1	6	3	10	0	9	1	42
	合計	16	1	7	6	10	0	17	4	61
合計		50	2	12	7	21	1	39	4	136
外集団										
ピア優位群	男性	5	1	2	2	5	1	0	0	16
	女性	3	0	2	2	10	0	1	1	19
	合計	8	1	4	4	15	1	1	1	35
未熟群	男性	1	1	1	3	7	0	2	0	15
	女性	0	2	2	1	13	0	6	1	25
	合計	1	3	3	4	20	0	8	1	40
チャム優位群	男性	4	1	1	4	4	0	4	1	19
	女性	4	0	8	5	20	1	2	2	42
	合計	8	1	9	9	24	1	6	3	61
合計		17	5	16	17	59	2	15	5	136

青年期後期を対象とした。330部を配布し、143名分を回収した。回収率は43.3%であった。不備のあるものを分析対象から外し、139名分(男性:52名,女性:86名,記入なし:1名)を分析対象とした。平均年齢は21.4(SD=2.3)歳であった。

評定の一致率

方法で示したカテゴリーの評定基準に従って評定を行った。筆者と筆者以外の臨床心理学専攻の博士後期課程在籍の者に全体の20%の評定を依頼したところ、その一致率は77.5%であった。その後、一致しなかったものに関して合議を行い、基準をより明確にした。その結果、すべてにおいて評定の一致を見た。その基準に従い、残りを筆者が評定して確定した。評定結果は表3の通りと

なった。

表3の結果を見ると、度数に散らばりが見られ、②攻撃表現から⑥その他の項目の度数が少なくなった。そのため、攻撃性が中和化されないカテゴリーの②攻撃表現から⑥その他を一つにまとめて、非中和のカテゴリーとした。測定不能を分析から外して集計し直すと表4の通りとなった。

表4 性別・クラスターごとの自由記述の評定結果
(非中和を1つにまとめたもの)

内集団		中和化	非中和	否認	合計
ピア優位群	男性	11	1	4	16
	女性	11	4	4	19
	合計	22	5	8	35
未熟群	男性	6	2	7	15
	女性	6	12	7	25
	合計	12	14	14	40
チャム優位群	男性	4	4	8	16
	女性	12	20	9	41
	合計	16	24	17	57
合計		50	43	39	132
外集団					
ピア優位群	男性	5	11	0	16
	女性	3	14	1	18
	合計	8	25	1	34
未熟群	男性	1	12	2	15
	女性	0	18	6	24
	合計	1	30	8	39
チャム優位群	男性	4	10	4	18
	女性	4	34	2	40
	合計	8	44	6	58
合計		17	99	15	131

男女を一緒にしたピア優位群、未熟群、チャム優位群の評定の比率に差があるかどうかを χ^2 検定によって検討した。その結果、内集団では1%水準($\chi^2(4)=14.1, p<.01$)で、外集団では5%水準($\chi^2(4)=11.3, p<.05$)で有意な比率の違いがあることが明らかになった。また残差分析によると、内集団への攻撃性に関しては、ピア優位群で攻撃性が中和化されているのが多く、攻撃性が非中和の者が少なかった。また、攻撃性が否認されているものも少ない傾向にあった。逆に未熟群では、攻撃性が中和化されている者が少ない傾向にあり、攻撃性が否認されている者が多い傾向にあった。チャム優位群では、攻撃性が中和化されている者が少なく、攻撃性が非中和の者が多いことが分かった。また、外集団への攻撃性に関しては、ピア優位群では、攻撃性が中和化されている者が多く、攻撃性が否認されている者が少ない傾向にあった。未熟群では攻撃性が中和化されている者

が少なく、攻撃性が否認されている者は多い傾向にあった(表5)。

表5 クラスターごとの評定の分布の残差分析結果

内集団	中和化	非中和	否認
ピア優位群	3.59**	-2.66**	-1.08 [†]
未熟群	-1.19 [†]	0.43	0.81 [†]
チャム優位群	-2.10*	1.96*	0.21
外集団			
ピア優位群	2.15**	-0.35	-1.80 [†]
未熟群	-2.29**	0.20	2.14*
チャム優位群	0.21	0.12	-0.39

注) [†]=p<.10, *=p<.05, **=p<.01

また、性差を検討するために、性別ごとに評定の人数比がどのように異なるかを、 χ^2 検定を行って検討した。その結果、内集団への攻撃性における男女間の比率の差は有意であり($\chi^2(4)=11.7, p<.01$)、外集団への攻撃性における男女間の比率の差は有意傾向であった($\chi^2(4)=4.76, p<.10$)。また、内集団における攻撃性の評定に対して残差分析を行ったところ、女性に攻撃性が非中和の者、男性に攻撃性の否認が見られるものが多いことが分かった。外集団の攻撃性の評定に対しては男性の方が女性よりも攻撃性が中和化されることが明らかになった(表6)。

表6 性別ごとの評定の分布の残差分析結果

内集団	中和化	非中和	否認
男性	1.24 [†]	-3.35**	2.11*
女性	-1.24 [†]	3.35**	-2.11*
外集団			
男性	2.14*	-1.79 [†]	0.14
女性	-2.14*	1.79 [†]	-0.14

注) [†]=p<.10, *=p<.05, **=p<.01

最後に、内集団における評定と外集団における評定の組み合わせの分布の差を χ^2 検定で検討したところ、1%水準で有意であった($\chi^2(4)=16.3, p<.01$)。さらに、残差分析を行ったところ、内集団への攻撃性が中和化されている群は外集団への攻撃が中和化されている者が有意に多く、否認されている者は有意に少なかった。内集団への攻撃

性が非中和の者は、外集団への攻撃性が中和化されることが有意に少なく、攻撃性が非中和、あるいは、否認される傾向があった。内集団への攻撃性が否認される者は外集団への攻撃性が非中和のケースが多く、攻撃性が否認される傾向が高かった(表7)。

表7 内集団・外集団の評定のクロステーブル

		外集団			
		中和化	非中和	否認	合計
内 集 団	中和化	13	36	1	50
	残差	3.23**	-0.62	-2.65**	
	非中和	1	33	7	41
	残差	-2.52**	0.98 [†]	1.39 [†]	
	否認	4	30	7	41
	残差	-0.87 [†]	-0.33	1.39 [†]	
	合計	18	99	15	132

注) [†]=p<.10, *=p<.05, **=p<.01

IV. 考察

ピア優位群、未熟群、チャム優位群の評定の比率に関する χ^2 検定は有意であった。よって、仮説1は支持された。残差分析を行うと、内集団への攻撃性に関しても外集団への攻撃性に関してもピア優位群で中和化されていると評定された人が多く、否認と評定された人は少ない傾向だった。よって、仮説2も支持されたといえる。つまり、ピア優位群においては、ほかの群と比べて攻撃性は中和化されることが統計的には示されたといえる。これは前回の量的研究⁵⁾とも一貫する結果である。本研究においても、仲間関係発達の成熟と攻撃性の扱いの関係性を示すものである。

ただし、表7を見るとピア優位群でも外集団に対しては攻撃性が中和化されない人も多かった。つまり、内集団に対しても外集団に対しても攻撃性が中和化される群と内集団に対する攻撃性は中和化されるが外集団に対する攻撃性は中和化されない群の2タイプがあると考えられる。この外集団に対する攻撃性が中和化されない人の多くは分類において、⑤の表出・表現なしに該当する人が多く、記述だと「伝えない」と回答した人が多かった。内集団では安全感があるために攻撃性を中和

化して主張をしたりすることができるが、まだその体験の内在化が弱く、一般化されていない。そのために外集団ではその安全感が保持できず、攻撃性が中和化して表現ができないということを示しているのかもしれない。青年期後期の集団同一性発達の観点からすると、まだ集団表象の内在化に発展の余地がある群と言えよう。内集団と外集団を区別することで提示できた本研究の成果である。

チャム優位群に関しては、内集団への攻撃性が中和化されるものが少なく、非中和のものが多かった。外集団への攻撃性は他の群と比較したときに際だった特徴はなかった。また、男女別に見たときには、内集団への攻撃性で男性に否認が多い傾向、外集団への攻撃性で女性に攻撃性が中和化されないものが多いことが分かった。よって、仮説3は内集団に対しては支持されたが、外集団に対しては支持されなかった。つまり、部分的に支持された。チャム優位群で内集団への攻撃性が中和化されないのは、同質性を重んじるが故に、独自性をもって主張したり、能動的になることが難しいことを示していると考えられる。内集団の中でも独自性を持つことに安全感を持つことができなく、攻撃性を中和化しない形で表現するか、表現そのものがないと考えられる。

未熟群において、内集団の攻撃性は中和化されているものが少なく、否認するものが多かった。一方で、外集団への攻撃性は、非中和という形で意識に上がっていた。性別の変数も考慮すると、男性の集団発達がそれほど進んでいないものは攻撃性を否認しやすいことが示された。仲間集団・友人関係発達に停滞のあるものは攻撃性を内集団に表現することが仲間集団・友人関係を壊す行為として感じられている可能性がある。そのために、表現することもぶつけることもできなく、その結果否認せざるを得ないと考えられる。一方で、女性の集団発達がそれほど進んでいないものは攻撃性を中和化せず表出する傾向があった。女性では、否認は少なく、非中和の形で表に上がるのは、未熟群であれども女性の方が言語的表現に馴染みがあるという性差として考えることができるかもし

れない。今後の検討課題である。

まとめると、①内集団への攻撃性・外集団への攻撃性ともに中和化される群、②内集団への攻撃性は中和化されるが、外集団への攻撃性は中和化されない群、③内集団への攻撃性・外集団への攻撃性ともに中和化されない群、④内集団への攻撃性は否認され、外集団への攻撃性は中和化されない群の4類型に分けられた。

V. 結論

本研究では、攻撃性と仲間集団経験発達の間接的関係を、自由記述の質的分析から検討した。その結果、ピア優位群では攻撃性を中和化して用いることができ、チャム優位群では攻撃性が非中和の者が多く、未熟群では攻撃性を否認する者が多かった。さらに、ピア優位群において、内集団と外集団の両方に攻撃性が中和化される群と、内集団にのみ攻撃性が中和化される群の2種に分けられることが明らかになった。内集団における攻撃性の中和化機能が外集団にも般化されるという発達プロセスがあることが示唆された。

VI. 付記

本論文は、国際基督教大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。指導教員であった国際基督教大学名誉教授小谷英文先生には、記して、深謝するものである。

VII. 引用文献

- 1) Freud, S. (1920). Beyond the Pleasure Principle. In *Standard editions of complete psychological works*. London: Hogarth Press. 18 vols. (フロイト, S. 井村恒郎他(訳)(1970). 快感原則の彼岸. フロイト著作集6. 人文書院)
- 2) Hartmann, H. (1952). The mutual influences in the development of ego and id. *Psychoanalytic Study of Child*, 7, 9-30.
- 3) Blanck, G. (1984). The complete oedipus complex. *The International Journal of Psychoanalysis*, 65, 331-339.
- 4) 小谷英文・中村有希・秋山朋子・橋本和典(2001). 青年期アイデンティティグループ—性愛性と攻撃性の分化統合を中核作業とする技法の構成—。集団精神療法, 17(1), 27-36.

- 5) 高田毅(2021). 青年期後期における仲間集団経験発達による攻撃性の中和化の違い。健康科学大学紀要, 17, 55-64.
- 6) 橋本和典・秋山朋子・中村有希・小谷英文(2003). 「青年期アイデンティティグループ」に関する研究(3). 日本心理学会第67回大会論文集, 306.
- 7) Kernberg, O. (1996). A Psychoanalytic Theory of Personality Disorders. In J. Clarkin, & M. Lenzenweger (Eds.) *Major Theories of Personality Disorder* (pp. 106-140). New York: The Guilford Press.